イスラエル

民族復活の歴史

ダニエル・ゴーディス 著

神藤誉武 訳

Israel

A Concise History of a Nation Reborn

Daniel Gordis

佐藤優氏（作家・元外務省主任分析官）推薦

２１世紀に日本国家と日本人が生き残るためにも
イスラエルの歴史をひもとくべきと思う。
中東情勢や国際政治に関心を持つ人だけでなく、
日本の現状を憂え、未来への展望を切り開きたいと考えている
すべての人に本書を薦める。

エラ・サラ・ベンサソン＝ゴーディスに捧げる

רָנִּי וְשִׂמְחִי, בַּת־צִיּוֹן

シオンの娘よ、喜び楽しめ

（ゼカリヤ書 2 章 14 節）

そして

ベイラ・ハイコフに捧げる

生涯貫くイスラエルへの情熱とユダヤの教育への取り組みは

彼女の子らの、そして孫たちの霊感となっている

泣きやむがよい、
目から涙をぬぐいなさい。
あなたの苦しみは報われる……
あなたの未来には希望がある、
あなたの子供たちは自分の国に帰って来る。

エレミヤ書 31 章 16~17 節

人間の生活は、生まれ故郷のどこかに、しっかりと根を下ろしているべきだ。そこでは、故郷の景色、人々がいそしむ労働、その物音や言葉の調子に、やさしい肉親の愛を抱くだろう。将来広い知識を身につけても、幼い日のわが家には、他には感じないはっきりとした郷愁を抱くものだ。そこで過ごした幼少の明確な記憶に愛情が織り込まれるだろう。

ジョージ・エリオット『ダニエル・デロンダ』

イスラエル――民族復活の歴史　目次

序　人類のある壮大な物語 …… 13

ユダヤ人の国造りを予見した文豪トウェイン13　イスラエルという奇跡14　シオニズムという革命16　歴史を通してイスラエルの国柄と国民の気質を知る19　歴史記述の問題――本書の執筆にあたって20

第1章　文学と政治――郷土を求めるユダヤ民族 …… 23

いつか再び故郷の地で23　東ヨーロッパのユダヤ人排斥が激化23　希代のヘブライ詩人ビアリク25　郷土再建の目覚め26　西ヨーロッパの反ユダヤ感情も一触即発に27　ヘルツェルとユダヤ人問題28　ユダヤ人には推定有罪が適用30　『ユダヤ人国家』という解決策31　シオニズムの先駆者たち――マプ、ヘス、ピンスケル33　第一回シオニスト会議――バーゼルから歴史が動く35　「君が願うなら……」38

第2章　生まれ故郷のどこかに …… 41

民族の誕生と同じくらい古い夢41　イスラエルの地を抜きにして、ユダヤ民族史は語れない42　エルサレムに神殿が建ち、王国は南北に分裂44　北王国の崩壊――アイデンティティと郷土46　ユダ王国の崩壊とバビロニアに抑留された国民46　エレミヤとハナニヤ――二人の預言者の論争47　バビロンの流れのほとりで、帰郷を夢見る48　シオン帰還の約束が実現する49　第二神殿時代――ペルシア、ギリシア、ローマの統治下で49　バル・コフバの反乱でユダヤの主権が完全に終わる51　ユダヤ伝統の叡智――なぜ希望を抱き続けられたのか52　ヘルツェルが示したビジョンは民族の有史以来の夢53

第3章　シオニズムは、イデオロギーではなく対話である
——二十世紀初頭におけるシオニストの分派　……55
ユダヤ人の期待感を打ち砕いたキシネフの虐殺55　なぜビアリクは憤ったのか57　ウガンダ案でシオニスト会議が紛糾59　アハッド・ハアム——文化的シオニズムと民族の精神性62　イスラエルを精神的なセンターに64　「強靭なユダヤ人」の育成を提唱したノルダウ66　ジャボティンスキーの修正派シオニズム67　A・D・ゴルドン——労働シオニストの聖者68　ユダヤ教とシオニズム——超正統派と宗教的シオニズム70　シオニズムは様々な夢の集合72

第4章　夢の実現にかすかな光　……75
オスマントルコ時代のパレスチナ75　第一次ユダヤ人帰還と新旧のユダヤ人社会78　ラヴ・クック——聖と俗の架け橋78　ヘブライ語を蘇らせたベン・イェフダ80　イシューヴのヘブライ文学——ヤヴェツとアグノン82　「篤志家」ロスチャイルドの支援84　開拓者たちの理想と現実86　第一次アリヤーの苦難86　苦悩する世俗の聖人——文学者ブレーネル87　シオニズムの象徴としてのキブツ運動89　女流詩人ラヘル90　テルアビブ——シオニストの精神にふさわしい町造り92　夢の実現への第一歩94

第5章　バルフォア宣言——イギリスがユダヤ国家を承認する　……95
「ヨーロッパ中の灯りが消えてゆく」95　オスマン帝国か、それともイギリスか95　古代ユダヤの矜持の復活——シオンのラバ部隊96　化学者ヴァイツマンのロビー活動97　中東を分割するイギリスとフランス98　イギリスに協力したスパイ組織「ニリ」100　吉報——バルフォア宣言101　イギリス軍がエルサレムに入城103　続くパレスチナの開拓104　ユダヤ的民主制度の起源107　パレスチナのイギリス委任統治始まる108　アラブ人暴動とジャボティンスキーの『鉄の壁』110　一九二九年のアラブ暴動——アラブ・ユダヤ紛争の始まり112　自衛組織ハガナーと戦闘集団イルグン113

第6章　どこにも行き場がない　……115
ドイツ国民は知っていた115　頭角を現し始めた若きベングリオン116　「移送協定」――ドイツの反ユダヤ政策とどう向き合うか117　ユダヤ人の帰還移民が急増――第四次、第五次アリヤー119　ビアリク世を去る120　イシューヴにユダヤ文化の出現121　アラブ反乱――イシューヴの発展に反発122　パレスチナ分割案を初めて提案したピール委員会124　ピール分割案を受諾するシオニスト会議126　「水晶の夜」――ナチスのユダヤ人攻撃が本格化127　ユダヤ人帰還移民を制限する一九三九年の「白書」128　行き場のないユダヤ人――三隻の難民船130　白書の移民政策に屈しないマアピリーム131　ナチスを支持したイスラム教法典権威アル・フセイニ132　ヴァンゼー会議でのユダヤ人絶滅計画134　ユダヤ国家建設がシオニズム運動の公式方針となる135

第7章　イシューヴはイギリスに抵抗し、アラブ人は分割案と戦う　……137
ヨーロッパの同胞を救うにはどうしたらいいのか137　ハンナ・セネシュとイシューヴの試み138　地下民兵組織レヒの誕生139　彷徨うヨーロッパのユダヤ人戦争難民140　キシネフはまだ過去のことではない142　キング・デーヴィッド・ホテル爆破事件143　ヴァイツマンの敗北145　新生国家の国境をできるだけ拡大145　国連の特別委員会とエクソダス号146　国連のパレスチナ分割決議案が採択される148　「ユダヤ人という理由だけで二度といじめられない」150　国家は銀のお盆に載せられて与えられるものではない151　独立戦争の一局目152　エツィヨン地区と護衛部隊ラメッド・ヘイの死闘153　秘密の武器庫「スリック」155　トルーマン大統領を口説くジェイコブソン156　苦戦が続くユダヤ勢157　パレスチナ難民問題の発端158　戦況を逆転させたベングリオンの戦略159　利用されたデイル・ヤシン事件159　襲撃されたハダッサ病院の輸送車両161　ゴルダ・メイールがヨルダン国王を訪問161

第8章　独　立――国家が生まれる　……163
一九四八年五月十四日、イギリス委任統治が終わる163　たった三十二分間で終わった独立宣言の式典164　国家の青写真を示す宣言書166　独立宣言に署名した建国の功労者たち167　「私は独り喪に服す」168　独立戦争の二局目――アラブ五カ国が攻撃開始169　エルサレム旧市街がアラブ軍団の手に落ちる170　必要は発明の母――創意工夫を凝らした戦い172　休戦協定が結ばれる173　海外から相次いで到着したボランティアたち174　ユダヤ人同士の戦闘――アルタレナ号事件175　アルタレナ号事件がもたらした教訓178　今も議論の絶えないリダの戦闘179　自己批判の声――ナタン・アルテルマン183　第二次停戦とアラブ難民問題184　ベルナドッテ伯の暗殺と地下組織の終焉185　あえて西岸地区を攻略しなかったベングリオン186　難民問題への真逆の対応187　ベングリオンの透徹した現実主義188

第9章　夢から現実へ　……189
第一回国政選挙189　ヘルツェルの遺骸をエルサレムに190　ヴァイツマンの大統領就任演説192　ユダヤ人のさすらいに終止符を打つ帰還法193　アラブ諸国からのユダヤ移民194　魔法の絨毯作戦196　新参移民の劣悪な生活環境197　無償の義務教育198　どうやってバラバラの国民を一つにするか198　映画『サラフ・シャバティ』に見る帰還者の現実200　国家意識の醸成――マムラフティユート201　マムラフティユートの功罪202　超正統派の未来を予測できなかったベングリオン204　アラブ住民に敷かれた軍政の影響206　期待はずれの反応を示したアメリカのユダヤ人208　アメリカは異郷の地ではないのか209　イスラエル国の驚異的な成功211

第10章　イスラエルが国際舞台に登場　……213
毎年数千の越境と襲撃を繰り返すアラブ人213　生き残るために戦う――第一〇一部隊の編成214　ベストセラー歴史小説『ヒルベット・ヒゼ』216　アリック・シャロンの決して変わらない原則217　モシェ・ダヤンの軍改革218　生存する

ためには力強く不屈であれ219　中東の勢力バランスを変えたエジプトのナセル220　エジプトの武力拡張を懸念する三国協約222　カフル・カセム事件――いつ、軍令に従うべきでないか224　イスラエル第二の独立戦争――シナイ作戦225　キエフの一少女が女傑政治家に226　イスラエルがアフリカの希望となるために228　成長を続けるイスラエル国家229

第11章　ホロコーストと向き合う　……231

アイヒマンの逮捕231　イスラエルの大胆な行動に世界中から非難の声232　ドイツとの交渉で国内に議論が巻き起こる233　補償金がイスラエル社会に与えた影響236　カストネルは自分の魂を悪魔に売ったのか237　自らの体験を語りたがらないホロコーストの生存者たち238　核兵器というイスラエルの安全保障239　決裂寸前となったアメリカのユダヤ人との関係241　アイヒマン裁判での生存者の証言242　自国を持つことのありがたさ247

第12章　六日間の戦争が国家に決定的な影響を及ぼす　……249

分断されたままの首都を嘆く249　ラビ・ツヴィ・イエフダ・クックの叫び250　ソ連にけしかけられたエジプトとシリア251　開戦の意志をちらつかせるエジプト252　エバン外相の外交努力も空しく254　エシュコル首相のラジオ放送での大失態255　見放すアメリカ、アラブに肩入れするフランス258　世界のユダヤ人による支援258　ホロコーストが中東に来るという恐怖259　イスラエル初の「統一政府」260　先制攻撃すればイスラエルは勝てる260　開戦前に決まった勝敗261　イスラエルの嘆願を退けて参戦したヨルダン軍262　「エルサレムの障壁を突破し、展望山に到達せよ」263　「神殿の丘は私たちの手に」――聖都に角笛が響きわたる264　ソ連の参戦を恐れ、シリア軍の対処に悩むダヤン265　激戦の末、シリアが休戦に合意266　イスラエルの決定的な勝利267　六日戦争の歴史的な検証268　安全と、自信と、誇りと、国際的な賞賛を掴む269

第13章　占領という重荷……271
「やむを得ない占領も、腐敗に繋がる占領だ」271　にわか仕立ての方針が未来に禍根を残す272　勢いづく宗教シオニズム274　正統派ユダヤ教徒レイボヴィッチの警世275　若く新しい宗教的理想家たち276　クファル・エツィヨンに帰った次世代277　宗教シオニスト運動グッシュ・エムニームの設立278　早過ぎた「アロン計画」279　安全保障の問題から宗教問題に280　幻滅を表現する声メイール・アリエル281　『兵士たちの談話』の反響282　占領という変革に混乱するパレスチナ人283　ヤセル・アラファトがＰＬＯの議長に285　独立と自由を求めるダルウィーシュの声286　イスラエルとは平和を結ばず、承認せず、交渉せず286

第14章　ヨム・キプール戦争――「通念」の崩壊……289
自信に満ちて様変わりしたイスラエル289　イスラエル不敗神話の象徴バルレヴ・ライン290　「消耗戦争」――ナセル最後の戦い291　「高校三年生の手紙」291　パレスチナ人のテロ活動が本格化292　ＰＬＯによってレバノンが崩壊293　ソ連を巧みに操るエジプトのサダト大統領294　戦争を回避できる機会は何度もあった295　次々と情勢判断を誤る軍首脳部296　贖罪日の静寂を破るサイレンと月光ソナタ298　戦闘の真最中でさえ無敵神話が蔓延298　イスラエルが崩壊寸前だった第一局面300　イスラエルの反撃が始まる301　父親が息子たちと共に戦った初めての戦争302　「七三年の冬」――イスラエル社会を覆う喪失感304　政府の失態に甘かったアグラナット調査委員会305　建国の父ベングリオンの死306　勝者のいない戦争――平和条約のきっかけに307　銃を持って国連総会に乗り込んだアラファト308

第15章　革命の中の革命――イスラエル政治右派の興隆と復讐……311
中東・アフリカ系ユダヤ人の音楽311　社会の隅に追いやられたミズラヒーの不満312　アラブ人やミズラヒー系ユダヤ人に寄り添うベギン313　逆転勝利――ベギン政権の発足315　エジプトのサダト大統領と和平を結ぶ316　アラブの過激

派に暗殺されたサダト大統領318　ガザ近辺の町ヤミートからの撤退319　グッシュ・エムニームの入植運動320　「ベギン・ドクトリン」――大量破壊兵器を容認せず321　イスラエル人を標的にしたＰＬＯの国際テロ活動323　「一九七六年の土地の日」324　一般市民を狙ってロケット弾を打ち込むＰＬＯ325　ガリラヤ平和作戦（レバノン戦争）326　サブラとシャティラの悲劇327　レバノン戦争がもたらした後遺症329　メナヘム・ベギンが遺したもの331

第16章　シオニストを手本に――パレスチナ民族主義の勃興　……333

ミズラヒー系の絶大な支持を得た宗教党シャス333　中東各地で目覚めるイスラム教への信仰心335　急速に勢力を拡大したイスラム原理主義組織336　第一次インティファーダ――パレスチナ人による一斉蜂起338　ＰＬＯがパレスチナ人の唯一正当な代表となる339　占領がイスラエル人にもたらした変化340　ソ連崩壊と百万人の帰還移民341　科学や芸術に貢献するロシア系ユダヤ人342　エチオピアのユダヤ人を救出した「ソロモン作戦」343　エチオピア系とロシア系の皮肉な共通点344　湾岸戦争にじっと堪えるイスラエル国民345　マドリード会議からオスロ合意へ346　早くも危機に陥ったオスロ合意349　イスラエルとヨルダンが結んだ平和協定351　和平の推進者ラビン首相が凶弾に倒れる351

第17章　滞る和平プロセス　……355

「シャローム、ハベル」355　ペレスからネタニヤフ、そしてバラクへ356　イスラエル軍のレバノン撤収357　初めから和平の意志がなかったアラファト358　シャロンの「神殿の丘」訪問359　はるかに凶暴な第二次インティファーダ360　クリントン在任中の最大の誤り361　シャロン首相のリアリズムとイスラエル左派の苦悩362　「防衛の盾作戦」と分離壁の建設によりテロ被害が激減363　アラファトの後を継いだアッバス366　シャロン首相によるガザ撤退の決断366　パレスチナ自治政府の選挙でハマスが圧勝368　常備軍のようなテロ組織との苦戦370　イスラエルが勝つことのできない戦争371　世界屈指の「新興企業大国」372　国連という「不条理の演劇」373　国連や人権保護団体のダブルスタンダード374　ユダヤ国家の消滅を狙うＢＤＳボイコット運動377　イランの核兵器開発にどう対応するのか378

第18章　ユダヤ国家におけるユダヤ文芸復興……381
「新しいユダヤ人」にポッカリ空いた穴 381　初期シオニズムからの大きな転換 384　イスラエル音楽界の宗教的な傾向 385　出版界や映画界でも見られる変化 386　イスラエルに起きつつある精神的な地殻変動 387　素朴な人間らしい生活を模索するイスラエル人 389　超正統派の優遇政策を見誤ったベングリオン 391　過激派ユダヤ教集団「丘の上の若者」 393　ヘルツェルの夢とアハッド・ハアムの夢 394

結び　バルフォア宣言から一世紀――「ユダヤ民族のための民族郷土」……397
多くの難局を乗り越えてきたイスラエル 397　ユダヤ人の気概と決意を駆り立てたエネルギー 398　『ユダヤ人国家』刊行から百二十年の間に実現した夢 399　イスラエルに移住したレバノン出身のイスラム教徒 403　イスラエルは未完のドラマ 404

謝辞 406

《巻末付録》
人物解説 412　用語解説 421　イスラエル国独立宣言 427　イスラエルの歴代大統領と首相 430
イスラエルの政党と権力バランスの変動 431　ユダヤ民族・イスラエル年表 432

巻末注 461　索引 473　訳者解説「諸国民の希望の光」 474

イスラエル　民族復活の歴史

凡　例

一、原書にあった脚注や、訳者の注釈については、本文中に ※ で数字を付して、見開き頁毎に左脇に示した。

一、原文にあった巻末注については（　）で数字を付して、原書のとおり巻末にまとめて掲載した。

一、地名、人名などの固有名詞、またヘブライ語のグループ名などの名称は、原則として原語に近い形で仮名表記した。

一、主要人物や用語に関しては、巻末付録の人物解説や用語解説を参照のこと。

序　人類のある壮大な物語

イスラエルで現実主義者になるためには、奇跡が起こり得ることを信じなければならない。[※1]

――イスラエル初代首相　ダヴィッド・ベングリオン[1]

ユダヤ人の国造りを予見した文豪トウェイン

「ユダヤ人は法律でロシアから締め出しを食らっている」と、アメリカの文豪マーク・トウェインが[※2]一八九八年のハーパーズ・マガジンに書いている。[2]「スペインは四百年前にユダヤ人を追放し、オーストリアはその数世紀後に追放。キリスト教のヨーロッパは、いつの時代も……ユダヤ人の生活を制限してきた。ユダヤ人は法令によって次々と職を奪われ、実際に何も残らなかった。農業を禁じられ、弁護士や医者はユダヤ人社会以外での開業は許されず、手工業も禁止された。教育機関も理科系の学校でさえ、この恐るべき敵対者には門戸を閉ざさねばならなかった」

だが、一人のユダヤ人が、現状を改善するためにある構想を抱いた、とトウェインは綴っている。「[テオドール・ヘルツェル]の計画をお聞きになっただろうか。彼は世界中のユダヤ人をパレスチナに集め、彼ら自身の政府を建てるらしい

※1訳注・ベングリオンの弟子で、後にイスラエルの要職を歴任したシモン・ペレスは、「ベングリオンの言うとおりだ。イスラエルの現実主義とは、不可能を実現することだ」と述べている。

※2訳注・マーク・トウェイン（一八三五～一九一〇）。アメリカの作家、小説家。日本では『トム・ソーヤーの冒険』などの作品が有名。一八六七年に地中海沿岸から中近東地方を旅して、パレスチナの情景を詳細に伝えている（『イノセント・アブロード』）。

――といっても、恐らくトルコ皇帝の管轄下になるのだろう。昨年の［第一回シオニスト会議］には……各地の代表が出席し、提案は圧倒的な支持を得て採択された」

トウェインは、ユダヤ人がこれまでに遂げた数々の功業を称え、ヨーロッパにおける彼らの窮状には同情を示し、また、パレスチナに国家を築きたいという新たな願望にも少なからず理解を表している。だが、一抹の懸念も抱いていた。「私は、トルコ皇帝でもないし、異議を唱えるつもりもない。しかし、もし、仮に自由な国で、世界中で最も悪賢いといわれる連中が集結するような事態が起きれば……それを阻止するのが政治というものだろう。ユダヤ民族が、自分たちの潜在力に気づいたら大変だ。馬がその力を知ったら、もう乗れなくなる」

イスラエルという奇跡

恐らく、トウェインは、自身の先見性に気づいてはいなかったのだろう。イスラエルの建国は、彼の記事がハーパーズに掲載されたちょうど五十年後に実現する。それは、色々な意味で人類史上稀（まれ）に見る驚異的な物語だ。あの苛酷な時代を耐え抜き、ほんの数十年の間に凄まじい発展を成し遂げ、繁栄の高嶺に上り詰めた民族が他にいるだろうか。この一世紀の間にイスラエルで起きたことは、間違いなく現実だが、時として夢物語のように思えることがある。

イスラエル――それは郷土を失った民族が、二千年の間、一つの夢を抱き続け、存亡の危機から救われ、絶対に不可能だと思われた中、自らの未来を築き上げていく物語である。ユダヤ人は、紀元七〇年にローマ軍によってユダ地方から追放された。以来二千年間、父祖の地に帰ることを夢見続けてきた。彼らの日毎の礼拝には、神が自分たちを郷土シオン[※1]へ帰してくれるように求める祈祷をはじめ、エルサレムに関する祈りが数多く存在する。ユダヤ人はどこにいても、エルサレムの方角を向いて祈った。過越祭（ペサハ）の晩餐では、必ず最後に「来年はエルサレムで！」と唱えた。ユダヤ人が自ら望んでシオンを離れたことは、一度としてない。彼らはいつの日か父祖の地に帰還できることを信じて疑わなかった。

十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、ユダヤ人は少しずつパレスチナに帰還し始めた。ヨーロッパにおけるユダヤ人迫害の激化は不可避と判断して移り住む者もいれば、純粋な思想に駆り立てられて帰還する者もいた。当時のヨーロッパはナショナリズム全盛期で、ユダヤ人も独自の国家を持つべきだと考えた。しかし、この夢が実現するのは、ユダヤ人自らの祈りによってではなく、不幸にも、二十世紀最大の惨事が直接の要因となったのである。

一九一七年、イギリスはバルフォア宣言を発して、ユダヤ国家建設を支持したが、その後の具体的な進展は遅かった。イギリスの態度は、曖昧さからやがて敵意へと変わった。一九三〇年代には、パレスチナへのユダヤ移民を阻止し始め、ようやく現実味を帯びてきたユダヤ国家建設というシオニズムの希望を挫こうとした。同じ頃、ポーランドには世界最大のユダヤ人コミュニティーが存在したが、一九三九年から一九四五年にかけて、ナチス・ドイツはポーランドに住む三百三十万のユダヤ人のうち九割を虐殺。最終的に世界のユダヤ人口の三分の一を殺害した。

この史上類例のない虐殺の影響もあり、国際世論は徐々に変化していった。ユダヤ人に定住地が必要なのは、もはや自明のこととなった。シオニストたちは、建国に備えて様々な機関を設立し、やがてイギリスをパレスチナから撤退させた。一九四八年五月、イスラエル国は誕生した。

建国当初は困難の連続だった。資金の蓄えもなく、インフラ設備も全く不充分な中、当時のイスラエル人口をはるかに上回る大量の移民を一挙に受け入れなければならなかった。イスラエル国の独立と共に、数十万単位のユダヤ人が、北アフリカ、イラン、イラク、その他の国から追放され、大挙してイスラエルに押し寄せた。他方、ヨーロッパからは、ナチスによるユダヤ人大虐殺を生き延びた十五万人のユダヤ難民が、壮絶なトラウマを抱えてイスラエルに生還。イスラエルの地は、そもそも人の住めない沼地や未開の地、不毛の荒れ地ばかりで、天然資源に乏しく、資金も皆無に等しい。イスラエルの国は選択の余地もなく、大量の難民すべてを養い、住居を与え、食料配給を開始した。そして建国した数年後には、財政破綻寸前の危機に直面した。

だが、イスラエル人は屈しなかった。一つには、他に行き場がなかったからだ。このような中、長い間イスラエル建国に曖昧な姿勢を示していたアメリカのユダヤ人が、存続に不可欠な資金を提供した。また、ドイツはホロコーストの補償金を支払った。イスラエルは、貧困と虚弱状態からゆっくりと這い上がっていった。インフラを整備し、交通機関、製造業、送水システム、数多くの住宅建設に取り組んだ。やがて国の体力がついてくると頭角を現し始め、アメリカ、イギリス、フランスと組んで世界レベルにまで成長した。建国後の二十年間、イスラエルは繁栄と新たなユダヤ人像を示し、そ

※1訳注・シオンとは、聖書の中でエルサレムと同義語で用いられ、やがてユダヤ民族の郷土イスラエルそのものを意味するようになる。

れに鼓舞されたソ連のユダヤ人は、イスラエルへの移住許可を要求した。数十年後、イスラエルは経済技術大国となり、西洋諸国の羨望の的となった。ナスダックに上場する企業数は、ヨーロッパ大陸の総数を上回った。

イスラエルはあらゆる分野で驚異的な繁栄を成し遂げた。一九五〇年代には、食料配給制を設けていた国が、二〇〇〇年には、国際的に栄誉ある賞を獲得するワインを数十種も生産するようになる。何十年もの間、テレビ局が一つ（国営テレビ局）しかなかった国が、今や数多く存在し、さらにアカデミー賞を競うような映画を制作するようになった。ホロコースト生存者を数多く受け入れたイスラエルは、その絶望と無力さのイメージとは対照的に、やがて軍事大国となった。長い間、学問を神聖視してきた人々は、その文化を新しい国に活かし、ノーベル賞受賞者を次々と輩出させ、数多くの研究分野で世界水準を確立し、驚くべき成果をもたらした。

シオニズムという革命

イスラエル建国の物語は、革命の物語でもある。[※1] シオニズムとは、ユダヤ人の民族解放運動であり、ユダヤ人の実存を一新する運動だった。[※2] シオニストたちは、今こそユダヤ民族が新生する時だと訴えた。

シオニズムは様々な形で旧来のユダヤ教との摩擦を生んだ。ヨーロッパで繰り返される迫害によって、ユダヤ人は絶えず社会の片隅に追いやられていた。シオニストの指導者たちは次のように論じ合った。確かにヨーロッパは悪い。だが自分たちユダヤ人にも原因があるのではないか。虐待の危険に怯えつつ、自分たちを追放あるいは殺害しない限りその国に居座り続ける、そんな生き方をやめる時が来ているのではないか。イギリスは一二九〇年に、スペインは一四九二年にユダヤ人を国外追放し、残酷なヨーロッパの反ユダヤ主義が始まった。これについても、シオニスト指導者たちは不満だった。なぜユダヤ人は、自主防衛して歴史に立ち向かおうともせず、いつもなされるがまま、卑屈で怯えながら、古びた宗教書物に身を埋めているのか、と。

変わらねばならないのはユダヤ人自身ではないのか。草創期のシオニスト思想家の多くはそう考えた。彼らの革命への熱情は徹底していた。シオニズムとは、色々な意味で、これまでのあり方と決別することだった。彼らは新しいユダヤ人像の必要性を痛感し、自らの名前をも改めた。イスラエルの最初の四人の首相を例に挙げてみよう。初代首相ダヴィッド・ベングリオンの出生名はダヴィッド・グリュン、二代目のモシェ・シャレットはモシェ・シェルトック、三代目のレヴィ・

エシュコルも元々はレヴィ・シュコルニック、四代目のゴルダ・メイール（イスラエル初の女性首相）はゴルダ・マイヤーソンだった。改名は過去との決別――「ノーモア！　もうたくさんだ！」という意志表明だった。それはユダヤ人の世界観、容姿、郷土、名前、すべてが一新された「新ユダヤ人」であり、ユダヤ民族再生の時である。

この新しいユダヤ人像は、イスラエルの国に出現した。その形態も多種多様だった。イスラエルの魅力の一つは、ユダヤ教やユダヤ人についての議論が今なお続いていることである。ユダヤ教、ユダヤ人のあるべき姿は何か、またその未来像は何か。この議論は、時には節度をわきまえ、時には口角泡を飛ばして、イスラエルの様々な政治問題も関連付けて論じられる。今日のユダヤ人は、かつてのヨーロッパで萎縮した臆病なユダヤ人とは一線を画した。シオニズムが新しいユダヤ人を生み出したのはまぎれもない事実であり、この点において見事に成功したと言える。

またシオニズムは、一つの可能性に対する革命でもあった。ユダヤ人が世界のどこにも安住の地を見出だせないかも知れない、という可能性に対してである。二十世紀の半ば、ヨーロッパ全土が殺戮的な憎悪に駆り立てられていたとき、多くのユダヤ人に逃げ場はなかった。アメリカは門戸を閉ざし、カナダもそれに続いた。イギリスはパレスチナに避難しようとするユダヤ人を阻止した。多勢のユダヤ人を乗せた船は、入港を許可してくれる港を必死で探したが、しばしば拒絶された。ホロコーストを命からがら逃れたユダヤ人を乗せた船は、ヨーロッパに送り返えされるか撃沈された。要するに、どの国も「余計なユダヤ人」など受け入れたくなかったのだ。シオニズムはこの現状も変えようとした。ユダヤ人が世界のホームレスになるようなことは二度とあってはならない。その願いをも、イスラエルの建国が実現へと導いた。

※1訳注・本書でいう「革命」とは、フランス革命や共産革命のような、歴史や文化を全否定して理想社会を築こうとした変革とは色合いが異なる。むしろ、日本の明治維新のように、「旧来の陋習を破り」、民族特有の歴史や文化に基づいた改革に近い。それは、ユダヤ人の多くがシオニズムに目覚めて、出生名をヘブライ風（ユダヤ的）な名前に改めていることにも窺える。

※2原書注・「シオニズム」という用語は、ユダヤ民族の郷土（ホーム）をイスラエルの地に再建する運動を意味し、当時の著名な識者ナタン・ビルンバウムが考案した。ビルンバウムはこの用語を一八九〇年四月一日、雑誌『自己解放』に掲載した一文で初めて用いた。（Lawrence Epstein, *The Dream of Zion: The Story of the First Zionist Congress* [Lanham, MD: Rowman and Littlefield, 2016], p. 13.）

流浪の地で幾世紀もの衰退期を経て、シオニズムはユダヤ文化遺産の復興に取り組んだ。父祖の地で生活し、自らの言葉で話し、自らの未来像を描く上でそれは必要だった。ユダヤの祈祷書にあるように、ユダヤ人は「世界に四散」したが、シオニストは彼らを再び集めようとした。かつて日常語として使われていたヘブライ語は、二千年の流浪の結果、神聖な書物や祈祷書を朗読するときにだけ用いる宗教言語になってしまった。シオニズムはこの古代語を日常語に復活させた。ユダヤ人は、他民族同様、音楽、美術、文学、詩を生み出した。教養文化（ハイカルチャー）も大衆文化（ポピュラーカルチャー）も生まれた。祖先たちが住んだ町に住み、聖書時代の先人たちが親しんだ街路を再び歩くようになった。指導者たちは、戦争、平和、経済、医療、移民などに関する方針を打ち出すようになった。これらすべてにシオニズムは多大な成果をもたらした。本書は、現在のイスラエルが、ユダヤ民族の復活をどのように体現しているのかを描こうとする試みでもある。

もちろん、シオニズムの理想すべてが実現したわけではない。例えば、テオドール・ヘルツェルやイズレイル・ザングウィルは、ユダヤ人が中東に多大な発展をもたらせば、地域の人々は歓迎してくれると信じていた。何の紛争もなくユダヤ国家が建設できるという彼らの期待と考えは、無垢（ナイーブ）な夢だった。実際、建国の数十年前からユダヤ人は熾烈（しれつ）な紛争の中に閉じ込められ、今なお解決の兆しは皆無という悲しい現実に直面している。

ユダヤ人が独自の国家を持てば、ヨーロッパや世界の反ユダヤ主義は消滅する。現代イスラエル国の立役者テオドール・ヘルツェルはそう信じていた。これもまた、無垢な希望だった。むしろイスラエルの存在によって、ユダヤ人に対する国際的な評価やヨーロッパのユダヤ人の生活は、より複雑になった。国際評価の変動もまたイスラエル史の重要な要素なので、本書ではそれも論じる。

イスラエルは複雑でダイナミックな地である。宗教的な由緒ある場所が無数にある一方、世俗的で（あるいは不敬とさえ言われる）活気溢れる繁華街や音楽シーンで満ちている。伝統に深く根ざした社会でありながら、超近代的（ハイパーモダン）な面を兼ね備えている。現代文明を遠ざけようとする超正統派（ウルトラオーソドックス）のユダヤ教徒が住み、世界有数のハイテク資本家も生活している。肌の色、風習、話す言葉の異なる様々なユダヤ人がいる。世俗的なユダヤ人もいれば宗教的なユダヤ人もおり、非ユダヤ人も多数暮らしている。また帰還者の多くは（人口比で、イスラエルほど多く移民を受け入れた国はない）民主主義の伝統を持たない国の出身者だったが、建国以来一貫して民主政

治を保ち、今も活発に機能している。国土や人口は極めて小さいが、絶えず世界から注目を浴びている。今日、世界の趨勢はこのユダヤ国家――その活力と複雑さを抜きにしては理解できないだろう。

歴史を通してイスラエルの国柄と国民の気質を知る

世界に注目されてきたイスラエルについて、本書のように、歴史的な緻密さとバランスの取れた視点で、一般読者を対象にした本は他に見当たらない。確かに優れた著作物はあるが、そのほとんどは大部で本書の二、三倍の長さになり、一般向けではない。またそれらの書物は、本書で最小限にしか触れていないようなこと、または割愛した事柄や事件をかなり大きく取り上げている。詳細を知るには良いが、本書が描写しようとする全体像としての「物語」が不明瞭になりかねない。

イスラエルに関する本の多くは、何が起きたのかを綴っても、なぜそれが起きたのかを説明してくれないことが多い。また、物語の様々な要素がどのように結びつき統合されていったのかを教えてくれない。イスラエルは国際情勢において中心的な役割を担う国であり、避けて通れないテーマである。そこで、本書ではユダヤ国家という理念の物語――その由来と軌跡、そしてその夢がどう実現したのかを書き表そう。

本書は、何が起きたかを伝えながらも、特になぜそれが起きたのかに焦点を置く。パレスチナに移り住み、国家を建設するというアイデアの起源はどこにあるのか。シオニストたちは、なぜ自分たちの国は他のどの場所でもないパレスチナに建設されるべきだと主張したのか。世界はいつ、またなぜこのアイデアを支持したのか。建国に携わった人の多くは、民主政治の営まれていない国から帰還した人たちだったのに、どうして建国当初から順調に民主政治を進めることができたのか。なぜイスラエル人は、あらゆる事柄に関して途方に暮れるほど激しく意見が分かれるのか。なぜイスラエル人とアメリカのユダヤ人コミュニティーは、重要な事柄についてことごとく見解が分かれるのか。どんな未来がイスラエルに待っているのか。

本書では、イスラエル人が自らを、また自国を理解するために大事にしている様々な出来事についても語ろうと思う。例えばアメリカ人にとって、ポール・リビアの真夜中の騎行[※1]、ジョージ・ワシントンが万難を排して達成した凍てつくデラ

※1 訳注・一七七五年四月十八日、アメリカ独立戦争に先駆け、ボストンに住むポール・リビアらは、イギリス軍の動きを察知し、独立軍の指

ウェア川の渡河[※1]、壮絶なアラモ砦死守の攻防戦[※2]など、自らの来歴を語る上で欠かせない物語があるように、イスラエル人にとっても欠かせない物語がある。そのような記憶に残る出来事を知ることによって、イスラエル人の考え方、歴史観、国家観、さらに国際世論にどう評価され、それをどう認識しているかを知る手がかりとなる。本書では、そのような重要な史実を中心に伝えよう。

また、歴史の舞台裏で活躍した、強靭（きょうじん）で、理想高く、特異な人々のことも紹介する。ただ、簡潔さを心がけ、出来事を俯瞰（ふかん）的に描写するよう努めた。例えば、戦争の記述にしても、イスラエルがなぜその戦争に引き込まれたのか、その経緯や主要因、またその戦争がどのようにイスラエル社会や国際関係に影響したのか、といったポイントに焦点を合わせる。イスラエルが関わった戦争での軍事戦略を記録した著作はすでに出版されていて、それが本書の主題ではない。

他にも本書で触れていない事柄がある。例えば、イスラエルの経済史は非常に興味深いが、イスラエル経済を救ったドイツの補償金、想像を絶するイスラエルのハイテクブームなど、一部の例外を除いて省略した。史実を簡潔に述べるという本書の意図に照らして、数多くの出来事や人物に関する記述も割愛せねばならなかった。

歴史記述の問題――本書の執筆にあたって

複雑で様々な課題を抱えたイスラエルという国に関して、なるべく簡潔に書こうとすると、必然的に「解釈」という要素が入ってしまう。一見「客観的」な事実と見えることでさえ、今なお論争のテーマであったりするし、主要人物の動機や意図などはそう簡単に分かるものではない。

また事実解釈とは別に、より難しい問題がある。イスラエルの歴史を、「どの視点から語る」のが最も妥当なのかという問題だ。書く人の視点によって同じ事例でも内容の異なるものとなる。イスラエルの功績をどのくらい評価するのか、失敗や挫折にどうスポットを当てるのか、記述内容の取捨選択、登場人物がなぜそう決断したのかなど。これらの要素すべてを、どのように統一するのか。このような歴史学の問題に話が及ぶと、読者の見解も必然的に各人各様となろう。

筆者は、このような歴史記述に関する諸問題を踏まえ、あくまでも事実に裏付けられた物語だけを記述するよう心がけた。イスラエルの業績と失敗、驚異的な歴史と不安に満ちた未来、善意に基づいた行為と破壊的な決断といった両側面を意識し、関連性のない出来事の羅列ではなく、一つの物語として伝えるよう試みた。優れた物語では、様々な人物が登場

し、栄枯盛衰（えいこせいすい）、百折不撓（ひゃくせつふとう）の歩みを繰り広げる。本書では、様々な人物、運動組織、政党、国家などが物語の主人公として登場する。この物語を綴るにあたっては正確性を期し、できる限り公正に記述するよう努めた。

本書『イスラエル――民族復活の歴史』が描くのは、極めて小さなイスラエルという国と、この国を生み出した古くからの理念（アイデア）の歴史である。それは、一つの国が長期にわたって逆境を克服し続け、今なお――克服不可能とも言われる――敵の脅威とあらゆる困難に直面する物語だ。それは、多大な代償を伴った民族復活の物語、ドラマチックな要素と哀しみの交錯する複雑な物語、読者を圧倒し奮い立たせる物語、世界の至る所に影響が及んでいる物語である。

さあ、物語を始める時が来た。何が起きたのか、そしてもっと重要なことは、なぜ起きたのかを知るために。

導者たちに知らせるために真夜中に早馬を走らせた。この伝達のお陰でイギリス軍の奇襲に備えることができた。

※1訳注・アメリカ独立戦争中の一七七六年十二月二十六日、苦戦を強いられたジョージ・ワシントン率いる大陸軍は、悪天候の中、危険の伴うデラウェア川渡河を決行し、イギリス軍を急襲する。この戦いで独立軍の勢いは大いに増し、独立戦争の趨勢が大きく変化した。

※2訳注・一八三六年、テキサス独立戦争でテキサス人の小部隊はサン・アントニオの僧院（アラモ砦）に立てこもり、包囲する約三千のメキシコ軍を相手に十三日間戦い、非戦闘員以外は全員玉砕した。この激戦は、テキサス人の敢闘精神とテキサス独立戦争の象徴となる。